

附属図書館長の任期満了を前にして

—附属図書館の更なる発展を願って—

徳島大学附属図書館長 際田弘志

はじめに

平成21年4月1日付けで附属図書館長に就任してから早2年が経過し、この3月で任期満了となります。まさにあつという間の2年間であり、ほとんど何も出来なかったように思いますが、図書館職員はじめ皆様方のご協力によりお陰様で何とか無事に務めることが出来ました。心からお礼申し上げます。退任にあたり、ほとんど知識ゼロの素人館長がこの2年間で学んだこと、感じたことを述べさせていただきます。

館長挨拶

平成21年4月1日に本部で辞令を頂いた後、改修がなったばかりで引っ越し真最中の本館1階閲覧室で全職員を前に就任の挨拶をさせられました。これが以降何かにつけてやらされることになる苦手な館長挨拶の最初でした。その後これも恒例の写真撮影です。その時の写真には職員の皆さんの名前を入れて頂き、常時鞆に入れて持ち歩いて皆さんの名前を覚えるよう努力しました。改修されたばかりの快適な館長室に入ることになり、実際に改修に尽力された石川前館長に申し訳ないような思いがしました。6月には改修記念式典を行い館長挨拶やテープカットなど不慣れな役割に戸惑いました。この後、次は分館の改修をとの蔵本の先生方からの圧力が日増しに強くなり気がかりでしたが、何とか平成23年度の計画に入れて頂くことが出来てホッとしております。これで本館、分館とも快適な図書館に生まれ変わり附属図書館の更なる発展の礎となると思われまます。

館長会議

就任早々の4月16日、17日に松江市に於いて中国四国大学図書館協議会の総会が開催され出席しました。続いて6月には新潟市で全国国立大学図書館協会の総会が開催されこれにも参加しました。参加者は知らない人ばかりでしたが、これらの会議で他大学の館長をはじめ関係者と意見交換をし、大学図書館が抱える課題や対応策などずいぶん勉強になりました。主な話題は電子ジャーナル経費の高騰についてでしたが、その他機関リポジトリやラーニング・コモンズなど当時としては聞き慣れない話題もあり、これらが大学図書館

の新しい姿になりつつあるとの認識を得ました。また、同じ頃エルゼビア社の社員と電子ジャーナル経費高騰について意見交換をする機会があり、情報の電子化を利用して金儲けをたくらむ欧米出版社のしたたかさを知って憤りを覚えました。このような経験から、情報の電子化に伴い将来の大学図書館は大きく変貌するであろうとの予感を強く感じるようになりました。またこの中国四国の次期総会（平成 22 年）は徳島大学の担当となっており、平成 22 年 4 月 15 日、16 日の両日に郷土文化会館で香川学長にもご挨拶頂き盛会のうちに終了することができました。

電子ジャーナル

情報の電子化に伴い大学図書館は大きく変貌しつつありますが、その象徴的なものが学術雑誌の電子化だと言えます。従来は重い冊子体の雑誌を何冊も借りてコピーをとっていましたが、現在ではほとんどの雑誌が研究室に居ながらにしてダウンロード／プリントアウトできるようになっております。しかしながらその経費は年々上昇し、その対応に長年頭を悩ませてきました。その結果極めて複雑な経費捻出のための方式（詳細は記しませんが）になり、多くの時間と労力を割いて議論し、年ごとに不足分を学長裁量経費などでの補填をお願いしておりました。この度本部のご理解を得てこれらの経費を一括して共通経費化して頂きました。経費高騰の問題が解決した訳ではありませんが、少なくとも数年間は部局としてはパッケージ化されていない必要雑誌のみを購入するという単純なシステムになりました。

機関リポジトリ

もう一つの情報の電子化に伴う図書館変貌の兆しは機関リポジトリです。従来の大学図書館の役割は書籍という形の情報を収集・保管し、学内のユーザーに提供することでした。しかしながら情報の電子化により出版という過程が不要となり簡単に情報を発信することが可能となったため、新しい図書館の役割として大学のあらゆる成果を発信することが考えられるようになりました。将来的には研究成果を、出版社を通さずに機関リポジトリを介して発信すれば電子ジャーナル経費高騰の問題も解決するものと期待されますが、解決すべき問題点も多く残されております。したがって、すぐにこのようなシステムができる訳ではありませんが、大学独自の電子化された成果発信装置を持つことは極めて有意義であり、その内容の如何が大学の外部評価につながることは容易に推察できます。我々の機関リポジトリはスタートしたばかりですが、アイデアを結集して名実ともに充実した機関リポジトリに発展することを願っております。

ラーニング・コモンズ

さて、このように情報が全て電子化してしまうと、その収集、保管、発信基地としての図書館は大型コンピュータとその保守要員のための組織になるおそれがあります。果たしてそれで良いのでしょうか。大学図書館の役割はこれだけではなく教育に関することもあるはずです。すなわち勉学の間としての図書館の役割も無視できません。かつては大学での勉強は自分でするものとされ、一人静かに勉強する姿が一般的でした。しかしながら、理由はいろいろですが、最近では友人と話をしながらの勉強が多くなっており、このような状況下で生まれたのがラーニング・コモンズ概念です。これは新しい図書館の役割としての、あらゆるタイプの勉学に合わせた施設・設備の提供を意味します。具体的なことは本館改修のコンセプトを見て頂けると解りますが、カフェテリアなどを備えたのもその一例です。

リテラシー教育

もう一つの教育的な大学図書館の役割として、活字文化の継承が挙げられます。電子情報化時代に活字文化はそぐわないと思われるかも知れませんが、読み書き能力のことで、いわゆるリテラシー教育を意味します。最近の若者の本離れが言われており、また“オタオメ”などの簡略表現や絵文字などを用いた携帯メールでのコミュニケーションなどのため、日本語の読み書き能力の低下が危惧されております。そのため図書館では、毎年学生を書店に連れて行き、好きな本を選ばせて図書館で購入するブックハンティングや読書感想文の募集・表彰などを行っております。また、各種レポートやエントリーシートの書き方講習会や電子データベースの使用法講習会などを頻繁に開催しており、リテラシー教育には特に力を入れております。これらの活動は一見地味ですが徳島大学の学生の基礎学力向上に資するものであり、更なる充実が期待されております。

貴重資料

徳島大学附属図書館には、伊能忠敬の古地図をはじめ重要文化財級の貴重な学術資料が保管されております。これらの貴重資料は、本館改修により新設された展示室にて随時展示公開されております。また展示公開に併せて一般市民をも対象に学内専門家による資料説明会・学術講演会を開催しております。毎回学外から多数の参加者を得て、附属図書館の地域貢献の重要な一翼となっております。これらの貴重資料は順次デジタル化が進んでおり、大部分は図書館ホームページから閲覧できますが、学外からの原本の貸し出し請求も

多くその資料価値の高さが窺えます。今回の本館改修で貴重資料保管室ができましたが、古い紙資料ですので劣化が進み破損の恐れも出てきております。しかしながら経費の関係で補修・修復処理はほとんどなされておらず今後の課題となっております。このような金食い虫の古物は不要との論もあるやに聞いておりますが、徳島大学の貴重な財産であり、このような文化遺産を尊重する気風の育成も大切ではないでしょうか。

おわりに

その他にも徳島大学附属図書館では機関誌メールマガジン「すだち」の発行や知的感動ライブラリーなどの様々な特色ある活動をしております。図書館職員は控えめな方が多くあまり声高に主張しませんが、これらの活動は対外的に高く評価されております。徳島大学附属図書館の更なる発展を目指し、今後とも図書館職員には積極的な活躍を、一般の教職員の皆様にはご理解・ご支援をよろしくお願い申し上げます。2年間ありがとうございました。